
Fw:Re:さっきのについて

御姉様と愚図な下僕共！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FW:Re:さつきについて

【コード】

N6494Q

【作者名】

御姉様と愚図な下僕共！

【あらすじ】

いやあ〜なんか盛り上がったちゃいまして、まあやることになったわけだ。

何故か執筆に私を使うと言う謎。

皆さんも意見があれば是非感想でおしえて下さいね！織り込んでいきたいとおもつので！

設定が溜まったらストーリーが作れるかも(笑)

あはは？。 笑って誤魔化す。

本編が始まってしまった……。あと、ジャンルをファンタジーから冒険にしました。

F W : R e : さつきのについて (前書き)

なんだか「リアデイルの大地〇て」(伏せ字の方がいいよね?)とか「ソード・アート・オン〇イン」(伏せ字適當すぎ?)とかに触発されて、よくわからんが作り始めた。

私は、これがどうなっても知らないもん(笑)

一切の責任を姉へ丸投げ(笑)

F W : R e : きつきのじついで

了解

まずは舞台。

舞台はS A Oタイプのゲーム

1つのアカウントで一度に3人ログイン出来る事と、選択したサブキャラの能力の一部がメインキャラに反映されるのが特徴

1アカウントにつき、3×10キャラ作成可
魔法あり

世界観としては

ゲームでは

地水火風雷氷光闇昼夜の十ヶ国が争う時代

四半期に1回領土権をかけた一斉戦争がある

本編は

水氷、風雷、光昼、闇夜、地火が合併して五ヶ国になっている

種族は

ヒューマン（器用貧乏）

ビースト（力自慢、火弱点）

ピクシー（飛行可、速い）

アンドロイド（命中補正、雷弱点）

エルフ（魔力高、魔法耐性強）

ドワーフ（作成スキル補正あり）

魔族（万能、光・氷弱点）

の7種族

さらにこれらの上位種がいる

スキル、レベル併用制

スキルは大雑把な系統として

武器スキル（ウエポン）

魔法スキル（マジック）

狙撃スキル（スナイプ）

隠密スキル（ハイド）

作成スキル（クラフト）

召喚スキル（サモン）

特殊スキル（エクストラ）

がある

スキルは

武器、作成、狙撃が熟練度制（使って上げる）

隠密、召喚、特殊がクエスト又は指南による習得制（たくさんおぼえれば上がる）

魔法のみ複合制（知識を貯めて使って試す）
となっている

スキルランクは

低い順に

初級＞下級＞中級＞上級＞最上級＞究極＞幻想
普通は究極までしか上がらない

全てマスターすることで1つだけ幻想ランクまで習得が可能になる
レベルは基本千まで

限界突破クエストにより千二百まであがる

能力の上がり方は種族と習得スキルに依存する

装備はレベル制で、スキルランクにより下限が下がる

レベルカンスト、究極ランクマスターで特典あり

まあ、こんな感じ？

F W · R e · s · o · u · r · c · e · s · o · f · t · w · a · r · e (後書き)

いやありアデイル読ませたら勝手に盛り上がったちゃいまして。

…良いのかな、こんなで？

2 / 0 3 (前書き)

2 / 0 3 に送られてきたメール。

私を巻き込むのはもはや確定事項なのですねぇ。

F W : 魔法体系

地水火風光闇

の6属性がある

その他属性は、組み合わせ。

攻撃、補助、強化、回復魔法、派生魔法等々がある

魔法のには

単発系、範囲系、追尾系、貫通系、大魔術などがある

F W : 条件による特典

レベルカンスト

ステータス補助効果の特殊装備

スキルマスター（通常スキル全習得）

一系統のみ、スキル限界突破（幻想ランク）

限界突破スキル（幻想ランク）完全習得
個々のスキルに応じた装備の取得

レベルカンスト & amp; 限界突破スキル完全習得
今までの戦闘スタイルに応じたオリジナル奥義習得

こんなもんか？

2 / 0 3 (後書き)

本当にこんなで良いのだろうか？
ストーリー無いって……………。

でも、世界を作らないと話の作りようが無いタイプの話だからなあ。

それに私は頭わるいし。自分で書いた内容忘れてしまっし。

はあ……………。

種族のうんぬん（前書き）

初期種族と派生種族についてだよん。
まあ未完成だから随時更新ってとこかな。

種族のうんぬん

F W : 初期種族

ヒューマン(人間)

エルフ(半精霊)

ピクシー(精霊)

ビースト(亜人)

ダークネス(魔族)

ドラゴノイド(竜人)

の六種

F W : R e 種族派生

< ヒューマン(人間)

< ニューマン(新人)

< フューマン(未来人)

< ハイランダー(高野族)

< エンシェンツ(古代種)

<

<

- < エルフ (精霊人)
- < ハイエルフ (王族)
- < セイクリッド (神族)
- < ?
- <
- <
- < ピクシー (妖精)
- < フェアリー (風精)
- < シルフ (風精霊)
- <
- <
- <
- <
- <
- <
- < ビースト (亜人)
- < フォックス (狐人)
- < ワーウルフ (人狼)
- < カムイ (熊人)
- < ミコツテ (猫人)
- < ? (獅人)
- < ? (豹人)
- < ウイングス (翼人)
- < ? (飛人)
- <
- <
- <
- <
- < ダークネス (魔族)

< < <
<ドラゴノイド(竜人)
(

種族のうんぬん（後書き）

アクセス解析したらさ、何人か読んでる人いるみたい。
いがいだよね。

名前の素 改訂版（前書き）

名前の素です。

読んでみて思い付いたものがあれば、是非感想へ御願ひします！

また、オススメする単語、記載して欲しい単語なども募集しています。同じく感想へ御願ひします。

名前の素 改訂版

音楽用語

cependant スパンダン
しかし、それでも

kraeftig クレフティヒ
力強く

charme シャルム
優雅、優美

clair クレール
明るい、輝く、清らかな、高い

contatta la forza
コン トウッタ ラ フォルツァ
全力を込めて強く

emeriionne エメリヨネ
生き生きとした、活発な

evaille エヴァイエ
快活な、生き生きとした

iris e イリゼ
光彩を纏う、虹色になった

jour ジュール
昼、日の光

schwungvoll シュヴングフォル
生き生きとした、活気のある、熱のこもった

vif「vive」ヴィフ/ヴィヴ
生き生きとした、活発な、強い

incisif アンシジフ
切るように、鋭く

keineswegs カイネスヴェesk
決して〜ではない

al fine アル ファーネ
最初に戻り最後まで

fine ファーネ
終わり

riff リフ
繰り返し

ad libitum アドリビトゥム
自由に

a m e アーム

魂、感情

a r d i t e z z a アルディテツツア

大胆に、強く

e s t r i n c i e n d o エストリチユンド

力強く、ハッキリと

s o r d a m e m t e ソルダメンテ

静かな、曇った、こもった

c e l e s t e セレスト

天の、神の、天上の

i n f e r n a l e インフェルナレ

地獄の、恐ろしい

N a c h t m u s i k ナハトジーク

夜曲、セレナード

伝説と神話

d a i n s l e f ダインスレフ

i a i s アイアス

a r o u n d i g h t アロウンドライト

e x c a l i b u r エクスカリバー

オリジナルと詳細不明

R y u u t o リユウト
龍人、龍屠、龍を屠る者

Z e t ゼト
零？虚無？

s a c r e d セイクリッド
聖なる、神々しい、e t c .

z a i s ゼルス
虚無、終焉、e t c .

c a n n o n カノン

ユファイ

dice
ダイス

ロット

ソルエ

melt
メルト

ヒュー

アルメリア

レイナス

scythe
サイス

ハルベルト

lotta
ロット

w f e n フェン

y o l n i e ヨルニエ

r i a l l リラル

a c a r e a アセリア

m y u ムー

ニルバーナ

m a g l i c h k e i t

メークリツヒカイト

可能性、機会、チャンス

無限の可能性

u n m a g l i c h k e i t

アンメークリツヒカイト

不可能な

名前の素 改訂版(後書き)

名前が集まり次第、まとめて出したいと思います)^^^ゞ

じゃは？

F W : ステータス設定 (前書き)

種族ごとの細かいステータスなりけり。

FW：ステータス設定

ステータスの種類は以下の通り

筋力（物理攻撃力）
耐久（物理防御力）
魔力（魔法攻撃力）
耐性（魔法防御力）
敏捷（素早さ）
HP（体力）
MP（魔力量）

ステータスはランクで表される
高い順に

S < S < A < B < C < D < E

ランクに+が付くことにより、そのランクより少々上の能力値になる

例） A < B + < B

パーソナルスキルは種族固有のスキル。

Date： Sun , 27 Feb 2011 15:57:24
+0900

Subject： 種族ステータス1

ヒューマン（初期）

こちらの世界でいう人間。平均的な能力をもつ。

パーソナルスキル 文明の利器（装備付加効果にボーナス）
ステータス

筋力C 耐久C 魔力B 耐性C 敏捷C HPB MPC

ニューマン（中位）

やや魔法寄りになったヒューマン。パーソナルスキル サモンフレンジ（下位召喚に+補正）

ステータス

筋力C 耐久C 魔力B 耐性C+ 敏捷C HPB MPB

ハイランダー（中位）

やや力寄りになったヒューマン。

パーソナルスキル 戦士の心得（近接におけるシステムアシスト）
弱）

ステータス

筋力B 耐久C+ 魔力C 耐性C 敏捷B HPB MPC

エルフ（初期）

MPの伸びが高い。半精霊と呼ばれる種族。

パーソナルスキル MP自動回復中
ステータス

筋力C 耐久E 魔力C+ 耐性C+ 俊敏C HPC MPB+

ハイエルフ（中位）

エルフの王族。

パーソナルスキル MP自動回復高
ステータス

筋力C 耐久D 魔力B+ 耐性B+ 敏捷C+ HPC MP A

ドワーフ(中位)

半精霊に珍しく力に優れている。

パーソナルスキル 職人気質(作成に高補正)
ステータス

筋力A 耐久B+ 魔力C 耐性B 敏捷E HPB+ MPB

- - - - -
Date: Mon, 28 Feb 2011 22:20:52
+0900

Subject: 種族ステータス2

ピクシー(初期)

パーソナルスキルにより、ダメージの一部をMPダメージにする。

パーソナルスキル MP自動回復小 飛行 精霊体(HPダメージの一部をMPダメージに変換)

ステータス

筋力C 耐久D 魔力B+ 耐性C+ 敏捷C+ HPE MPB

フェアリー(中位)

風に親しむピクシー。飛行能力をもつ。パーソナルスキル MP自動回復中 飛行 精霊体(HPダメージの一部をMPダメージに変換)

ステータス

筋力C 耐久D 魔力A 耐性B+ 敏捷B+ HPD MPB+

ビースト(初期)

獣の特徴をもつ。

パーソナルスキル ビーストアッパー

筋力C+ 耐久C+ 魔力D 耐性D 敏捷B HPB MPD

フォックス(中位)

狐の特徴をもつ。

パーソナルスキル 瞬発加速(MPを消費し、一動作を高速化する)

ステータス

筋力B+ 耐久B 魔力D+ 耐性D 敏捷B+ HPB+ MPD

ミコツテ(中位)

猫の特徴をもつ。

パーソナルスキル 持続加速(MPを消費し、一定時間高速化する)

ステータス

筋力C+ 耐久C+ 魔力D+ 耐性D 敏捷A HPB+ MP

D+

ウイングス(中位)

鳥の特徴をもつ。飛行能力はない。パーソナルスキル なし

筋力C 耐久C 魔力C 耐性C 敏捷C+ HPC MPC

ダークネス(初期)

能力は高いが、ドラゴノイドと同族以外に嫌われる。

パースナルスキル なし

ステータス

筋力B 耐久C+ 魔力B 耐性C+ 敏捷B HPB+ MPB

ドラゴノイド（中位）

人間が嫌い。ビーストとは親しい。一部の装備が使えない。

パースナルスキル 竜族の血（ドラゴンブレスを使用可能）

ステータス

筋力B 耐久B 魔力B 耐性B 敏捷B HPB MPB

FW：ステータス設定（後書き）

まだありますがまた今度。

F W : 種族系図 改訂版 (前書き)

改訂版もとい完全版

FW：種族系図 改訂版

- - - - -
Date : Mon , 28 Feb 2011 22:44:29 +0900

Subject : 種族系図 改訂版

ヒューマン(人間)

ニューマン(新人)

フューマン(未来人)

ハイランダー(高野族)

エンシェンツ(古代種)

エルフ(番人)

ハイエルフ(王族)

セイクリッド(神族)

セレスト(聖族)

ダークエルフ(闇番人)

ダークハイエルフ(闇王族)

ドワーフ(土人)

ノーム(土精霊)

ピクシー(妖精)

フェアリー(風精)

シルフ(風精霊)

セイレーン(水精)

ウンディーネ(水精霊)

ウイル・オ・ウイスプ（炎霊）
サラマンダー（炎精霊）

ビースト（獣人）

フォックス（狐人）

ワーウルフ（狼人）

カムイ（熊人）

ミコツテ（猫人）

レオン（獅人）

レオパルド（豹人）

ウイングス（翼人）

ロツク（飛人）

ダークネス（魔族）

アークデーモン（魔人）

インフェルナレ（獄魔）

リザードマン（蜥蜴人）

ドラゴノイド（竜人）

エンシェントドラゴン（古龍）

ワイバーン（飛竜）

ドレイク（龍）

F W : 種族系図 改訂版 (後書き)

めっさ増えよった(笑)

F W : R e : F W : R e : ビフォー・ストーリー (前書き)

ゲームの制作開始から事件発生までをちよこちよこ抜き出しビフォー・ストーリーとして投稿。

姉たちと、メインストーリーや他の設定を考えるために作りました。

何故か、ビフォー・ストーリーの執筆は私です。

修正は姉が。違和感の有るところをちよこちよこやってくれました。
た。

むしろこんな話、自分で考えて欲しい。

私はメインの小説で其なりに忙しいのです！バカだから！

Fw:Re:Fw:Re:ビフォー・ストーリー

- - - - -

From: 姉

Date: Wed, 2 Mar 2011 23:03:00
+0900

To: 私

Subject: Re:Fw:Re:ビフォー・ストーリー

少々訂正

#無月 灰斗#

ボタン!

「灰斗!!」

全く騒々しい。会社に来るとか頭オカシイだろ? たく、死ね。

「うるせえ。死ね。どうした。」

そう返すと、ドアを壊さんばかりに入って来た、俺の変人な弟が叫んだ。

「ふはははっ! 新しいインターフェイスの開発に成功したぞ! これ
で今までに無い“ゲーム”が出来る!」

やっぱりコイツ死んだ方が良くないか？頭ん中ゲームの事しかねえよな。

「もつと有効な使い方があんだろ？」

我が弟が作りあげたインターフェイスとは、3年前に読んだある小説に出てきたヘッドギアのようなインターフェイスで、意識をインターネット内に入れる事が出来る。因みに入ると生命維持機能以外の神経の伝達を途中で拾い上げるため、遊んでいる間に怪我したりはしない。

「…ふつ。軍用などくそ食らえだ！私がか心血注いだ物で人を殺すなご許さない。」

はあ…本当に変人だ。直接的には殺してねえだろ。金に興味無しかよ。

「で？私に伝えてどうしようって？」

はよ、本題入れや。

「……………？忘れた。」

ゴスツ！

鈍い音をたてて顎にアッパーが入った。変人は50cm程浮き上がりながら3mほど放物線を描いた。更に3mほど転がり、起き上がりにサマーソルトを叩き込む。それでも尚、

「いやあ、とりあえず伝えなきゃ！とおもったわけですよ。」

と言いながら立ち上がった。全然堪えてやがらねえ。殺したい。微妙に力をそらしやがったしな。

「ヲ前：本気デ殺ルゾ？」

かなり強めに殺気をぶつけると縮み上がり、

「いや、マジでゴメンナサイ。許してクダサイ！」

と土下座したので許して

「やらん。」

?!?

>

<

¥\$%&'()*+,-./:;
?!@#~

!

「ぐえ。」

変人はクラスチェンジ！
ボロ雑巾になった！

そんな感じの6カ月前。

F W : R e : F W : R e : ビフォー・ストーリー (後書き)

こんな話を他の資料と一緒にちよこちよこやってきます。
御姉様少しは真面目に考えて下さい。御願います。

でない私の小説が進まないんだってば！バカだから！ 自分で言
つてて虚しい (^ ^ ;

B ' S 2 (前書き)

私殺られてばかりな気がする……。

#無月 紗那#

「…！」

心配。消してるつもり？

「先生。ちよつと失礼します。」

教室の後ろのドアから少し離れた位置に立つ。

ガラッ

左足を前に出し、身体を右回りに捻る。右足を跳ね上げ、遠心力を付けて打ち下ろす。

「紗くほっ！」

踵は確実に、突然ドアを開けた馬鹿を打ち据えた。

踵落としの勢いのまま前宙して、更に全体重のつた両の踵を頸椎へ叩き込む。

「何か毎回酷くないか？」

常人なら頸椎が折れかねない一撃を受け、平然と立ち上がる。化け物か？

「用事が有るなら授業後にしなさい！殺すぞ？」

馬鹿は舌打ちしながら、素直に出ていった。珍しい。

「じゃあ、あとで。」

そう言っただアを閉める。

静まり返った教室を見渡す。殆どの生徒が赤面していた。何人かは鼻血出している。

…そう言えば今日スパッツはいてない。

「さて、授業の続きをしますか。」

とりあえずスルーしておこう。

それが、3時間前。

そんでもって、今。

#無月 龍人#

「うう…痛い。虐めだ！絶対虐めだ！」

こんな事を、3時間前から延々と呟いている。あまり、本心では無い。実際の所さしたるダメージはない。姉弟妹の中で一番堅いからな。

「来たか。」

ツカツカと靴の踵を鳴らし、紗那が歩いてくる。

「待った？」

「待った！」

「様あ見ろ（ ）（ ）」

紗那 龍人 紗那の順。

酷くないか？と思いつつ、いつものことか。と納得する。…いいのか納得して？

「それで、だ。」

面倒臭いので本題に入る。

「例のインターフェイスに対応したゲームが完成した。6カ月も掛けるつもりは無かったんだがな。中々の大作になったよ。」

インターフェイスより先に作り始めていたんだがな。

「へー。で？」

反応薄っ！

「だから、ゲームマスターが必要だ。やれ。」

此が本題。人手が足りないのだよ。

「何で。嫌だよ。」

「いいだろ。どうせ成績もたいしたこと無いんだし。暇だろ？」

思ったことを素のまま口に出す。紗那の表面が変わった。

「死ねや。人が気にしてる事をつらつらと……。むしろ、殺すか？」

最後の方は独白だな。と言っか犯行予告？

「殺されるのは勘弁して。まだ、クリアしてないゲームがあんのよ。」

とてーも冷たい目で見られた。

「まあ、暇ならね。また、教室に殴り込んで来たら、絶対にぶち殺す。」

結局良いんじゃないか。さっさと帰ろう。洗濯物片付けなきゃ。

「あつそ。じゃあよろしくねえ。」

冷たい目線をスルーしてサクサク歩く。後ろで凄いため息を疲れた。

そんな、今日この頃。

B / S 2 (後書き)

設定が足りないのだよ。

メインストーリーは未々無理ですなあ。

F W : R e : スタータス・スキルその1 (前書き)

初期の設定からどんどん逸脱していく。まあ…いいか。

F W : R e : ステータス・スキルその1

- - - - -

F r o m : 姉

D a t e : S u n , 1 3 M a r 2 0 1 1 2 1 : 2 4 : 5

0 + 0 9 0 0

T o : 私

S u b j e c t : R e : ステータス・スキルその1

スキル・レベル併用制

レベルUPで、基礎ステータスが成長ランクによって、上昇する。
600LV以降200毎に制限解除クエスト。1000LV以上は
限界突破クエスト。

スキルの成長

2つ。

スキルを使う。 熟練。

スキルを覚える。 修得。

スキルを使う。

クラフト等なら作る。

魔法等なら使う。ただし、対象がノンアクティブの場合上がり方は
低くなる。練習用カカシなどもノンアクティブ扱い。

体術は、組手などでも上がる。

隠密は、ハイド状態を維持する。不意打ちをする。など。

召喚は、召喚時間。能力の高いモンスターを長時間呼び出すと上が

りやすい。

スキルを覚える。

大きく分けて、

熟練に応じて覚えるもの。

クエストで覚えるもの。

アイテムで覚えるもの。

に分けられる。

また、その他の方法でも覚えられるものもある。

以上。

F W : R e : ステータス・スキルその1 (後書き)

設定考えるの苦手ー (< >)

矛盾大歓迎 オイ

無月のキャラ（前書き）

ゲーム中のキャラですね。メインストーリー時のステータスです。因みに、龍人のキャラが12人で、他二人は3人ですね。

そのうち出てきます。

龍人は廃人です。色んな意味で。彼を廃人と呼ぶのは本物の廃人に失礼に思えるくらい、奇人変人廃人です。

（「。。。」*****

／＼

ファイヤー！

無月のキャラ

- - - - -

From: 姉

Date: Sat, 12 Mar 2011 22:00:00

7 +0900

To: 私

Subject: 無月龍人のキャラ

1st Lv1200

リユート・ダインスレフ

性別 女

種族 ハイランダー エンシェンツ

髪色 白

瞳の色 ライトグリーン

身長 165cm

魔法 メイン雷

有利 炎 風

不利 なし

主な使用武器 半片手剣 刀 銃器全般

通り名 白い悪夢

一人称 私

ステータス

筋力SS 耐久S 魔力S 耐性S 敏捷S HPS+ MPS+

固有パースナルスキル

刹那/瞬間移動。テレポートなどと違い、タイムラグ無しで瞬間移動出来る。音や光等のエフェクトも一切無い。

一閃/単発斬撃。攻撃スキル中最速の攻撃。武器により速度、威力は変わる。

2nd Lv1200
ゼト・アロングイト

性別 男

種族 ダークネス インフェルナーレ

髪色 紫

瞳の色 金

身長 179cm

魔法 メイン光

有利 炎 闇

不利 光

主な使用武器 両手剣 戦斧 棍 手甲 魔導弓

通り名 紫炎の守護者

一人称 俺

龍人のAIにより、最初の頃からつれ回していた。体術スキルが幻想ランク。

3nd Lv1111

アルフィーネ・リフ・アイアス (a l f i n e r i f f a i a s)

性別 女

種族 エルフ セレスト

身長 133cm

髪色 アイスシルバー (蒼銀) 瞳の色 蒼闇

魔法 メイン闇

有利 光 風

不利 闇

主な使用武器 細剣 長物全て 魔導系
通り名 微笑む悪意

一人称 私

ゼトと同じく龍人のAIにより連れまわされていた。制作時期が遅かったのと、小さな身長から、リユートとゼトの子供説が流れた。魔法スキルが幻想ランク。

- - - - -

From: 姉

Date: Sat, 12 Mar 2011 21:46:56 +0900

To: 私

Subject: 無月灰斗のキャラ

1st Lv1200

カインスヴェクス・アンメクリツヒカイト(keineswegs unmagischkeit)意味・決して不可能ではない

愛称 カイ、カインス

性別 男

種族 ハイエルフ セイクリッド

髪色 紺色

瞳の色 ライトグリーン

身長 185cm

主な使用武器 魔導弓 杖 光陣剣 ハルバード

魔法 メイン水 光 サブ火

有利 光 風

不利 闇

固有パースナルスキル

蒼穹の水鏡 消費MP1%〜20%/氷系超広範囲、高威力魔法。

ある程度までなら自分で範囲や威力を決める事が出来る。

通り名 蒼の魔王 ニブルヘイム

一人称 オレ

ステータス

筋力A+ 耐久A 魔力SS 耐性SS 敏捷A+ HPA MP
SS+

2nd Lv630

クレフティヒ・シュヴングフォル(kraeftig schw
ungvoll)意味・力強く生き生きとした

愛称 クレフ

性別 男

種族 ドワーフ

髪色 茶色

瞳の色 グレー

身長 150cm

主な使用武器 盾 飛刃

魔法 メイン地

有利 地

不利 無し

一人称 ぼく

サブキャラ時の性格 基本敬語な真面目君。かつ、大の戦闘嫌い。
作成スキルは究極までマスター。

3nd Lv820

イリゼ・ジュール(irise jour)意味・虹色の日の光

性別 女

種族 フェアリー シルフ

髪色 紅
瞳の色 闇色
身長 140cm
主な使用武器 両手剣 魔導砲 突撃槍 大盾
魔法 メイン光 風
通り名 召霊の紅牙
一人称 あたし
性格 明るい言動の猪突猛進娘。 召喚系の魔法スキルを究極までマスター。よく呼ぶのはユニコーンとフロストドレイク。

- - - - -
From: 姉
Date: Tue, 29 Mar 2011 21:36:51 +0900
To: 私
Subject: 無月紗那のキャラ
1st Lv1200
シヤナ・エヴァイエ
性別 女
種族 ニューマン フューマン
髪色 深紅
目 ライトグリーン
身長 150cm
主な使用武器 双剣 双短銃 双爪 両剣
主な魔法属性 風 闇
有利 風 地
不利 特に無し
一人称 わたし
通り名 紅の旋風
ステータス

筋力S 耐久S 魔力S 耐性S+ 敏捷SS HPS
MPS

固有パーソナルスキル
クイックチェンジ/装備を一瞬で入れ替える。登録数は熟練度で上がる。

紅の旋風/紅の旋風を纏い近接攻撃以外の攻撃を減殺する。武器に纏わせ攻撃する事も可能。

2nd Lv820

イクシス・ジュール

性別 男

種族 フェアリーシルフ

髪色 闇色

目 紅

身長 147cm

主な使用武器 両手剣 短弓 手裏剣 魔導砲

主な魔法属性 闇 地

有利 風

不利 特に無し

一人称 俺

通り名 紅眼の暗黒魔導師
ネクロマンサー

3rd Lv630

リオ・シャルム

性別 女

種族 ミコツテ

髪色 金茶

目 オレンジ

身長 171cm

主な使用武器 短剣 手甲 飛鉞 片手剣
主な魔法属性 光 炎
有利 地
不利 特に無し
一人称 ワタシ

無月のキャラ（後書き）

能力チートですね。まあ二人は龍人に引きずられて、チート化していったんですが。

因みに、この状態でも苦戦する敵キャラが出てくるゲームなので問題ないです。

序盤は初心者に優しく。中盤は歯ごたえしっかり。終盤は廃人仕様。究めたら、鬼畜マゾゲー仕様。です。

快く初心者を迎え入れ、徐々に洗脳し、沢山の廃人を作り出す、悪魔のゲームです？うん。

F W : R e : 初級魔法？ (前書き)

ノイコメント

F W : R e : 初級魔法？

- - - - -

From : 姉

Date : Tue , 5 Apr 2011 20:45:52

+0900

To : 私

Subject : Re : 初級魔法？

< 射出系

< 炎よ球となりて我が敵を焦がせ。 《ファイアボール》

< 水よ弾丸となりて我が敵を穿て。 《アクアバレット》

< 岩よ飛礫となりて我が敵を砕け。 《ロックレイン》

< 風よ飛刃となり我が敵を裂け。 《ウインドエッジ》

チュートリアルクエスト達成時に習得。他の初級魔法は、熟練か初期で受けられるクエストの達成により習得可能。

まだ考えついて無いけどね。

F W : R e : 初級魔法？（後書き）

考えるのが想像以上に難しい。

ビフォーストーリーだにや。(前書き)

別に全然関係ない小説の伏線でもありませんよ？決して。

ビフォーストーリーだにゃ。

ゲームマスターを確保して暫く…

無月龍人#

3年か。随分時間かかったな。

龍人は、ビルの一室にいた。そこは広大な面積を、ゲームのためだけの超速演算機器とそれを冷却する配管で埋め尽くされていた。

龍人が秘匿した数少ない技術。今の技術から言えばかなりオーバースペックだ。急激な技術革新は混乱を生む。今出して良いような技術ではない。

この場所の管理は、全てAIによって行われている。人の手は必要ない。それでも龍人はここに来た。意味はない。ただ、ここに来た。

「龍屠。礼は言わない。俺が死んだらこの技術は好きに使え。ただそれまでは、この技術も場所も絶対に外に洩らすなよ。」

「分かってるよ。つか、勝手に死ぬなよ。お前にやって欲しい仕事はいくらでもあるんだ。リユート同士もうしばらく仲良くしようぜ。それこそ、死ぬまでな。」

「矛盾してないか？まあこれからもよろしくな。何だったら会社用にAIを一つこさえたるか？とびっきりのヤツを（笑）」

「ああ、本社ビルが建ったらな。5年後か10年後か（笑）」

「じゃあ、それまでにゲームのほうをクリアしとかないとな。まあこのゲームに終わりはないが。とりあえず、ネット回線の敷設の続きよろしくな。今の回線じゃ処理落ちしてしょうがない。」

「任せておけ。今年中には、主要国家全てに敷設が完了する予定だ。しかし、良く一人でMMORPGなんて作ったな。インターフェイスも一人で作ったんだろ？奇人変人廃人じゃなきゃ、引く手数多だろうに。」

「引く手数多じゃ研究に集中できん。それにお前に雇われてるだろ。それでいいさ。」

龍人が作ったMMORPGの名前は《Revell-Gallian

レイヴ・ギャラ

ント》。意味は…忘れた。仮想現実世界の中でやるRPGだ。あ、ネットワークゲームだからね。インターフェイスは《データダイバー》。脳波とかに直接干渉して意識をゲーム内に落とし込める。起動中は体を動かす信号を途中で拾い上げるため、無意識に動きまわって怪我することは無い。因みにリンク率（外部環境の感覚の遮断率は80〜99パーセントまで設定出来る。理論上100パーセントまで可能だが、リミッターが付けてある。軍事利用の価値が高いが、龍屠の国際干渉により軍事利用を国際法で禁止されている。

「いつか、休日とってやりに行くから。よろしくな。」

「分かった。待ってるよ。じゃあ俺はアイツ等誘ってログインするから、あとのことは任せた。じゃあな。」

龍人は部屋から出ようと歩き出す。ドアに手をかけたとき、

「無月龍人。お前は一人でやりすぎだ。多少人を頼れ。」

「十分頼ってるよ。灰斗も紗那も俺が研究してる間、生活費稼いだり色々やってってくれる。今度は俺が作ったゲームで楽しくやってくれりゃ文句ないさ。社長さん。アンタももう少し部下を信用するんだな。」

若干捨て台詞のように言いながら、龍人は出て行った。

そして、

その部屋には超速演算機器がただ静かに、鎮座していた。

Re:BS/さあ、ゲームスタート！（前書き）

まだメインストーリーじゃないよ。まだまだ。

Re:BS / さあ、ゲームスタート！

無月 灰斗

目の前が暗闇に包まれる。一つずつ感覚が削ぎ落とされる。そして視覚だけが暗闇の中に文字列を捉える。そこには…

さっさとキャラ作ってはいれよ。先に入っているから。

と、書かれていた。

初めての感覚に浸らせるよ。ぶっ殺してえ。

灰斗はキャラ作りに専念し始めた。

体が燐光に包まれ軽い浮遊感を味わう。次に地面に足が着いた時には、目の前に賑やかな街並みが広がっていた。

「おお、すごい。」

辺りを見渡す。広場のようだ。沢山の人が歩いている。地面は石で舗装されている。建物は恐らくレンガだろう。

「お〜い！こっちだよ。」

見知らぬ女性が、こちらに手を振っていた。背中の中ほどまでの白

髪、エメラルドのような輝きのライトグリーンの瞳。その目は間違
いなくこちらを捉えている。

ライトグリーン？確か、私たちはファーストキャラをライトグリー
ンの瞳にするって決めていたな…。

白髪の女性が近づいてくる。容姿は中の上か。周りは美男美女ばかり
というのに。半端な見た目にするのは少数派のような気がするが。

「カインスヴェクス・アンメークリツヒカイトねえ。よく、そんな
長つたらしい名前にしたね。変なの。男の子なんだ？」

そう言っただけ微笑む。その姿は少女のようだ。言っている内容は失礼
だが。

「リユート・ダインスレフか。お前こそ、女じゃ無いか。つか、似
合い過ぎて気色悪いぞ？それにオレは男の子って見た目じゃない
だろうが。」

若干不機嫌に言い捨てると、リユートは眉間にシワを寄せて上目遣
いで睨んできた。

「それなら、私も女の子ですよ？カイトは、頭の中で女の子じゃ
なくて女か女性になってるでしょう。ふふふつ、一人称オレなんだ
かわいい」

なんで、わかるんだ。ムカつく奴だ。

「悪いかよ。ってか、かわいって何だよ！ぶつ殺してえ。」

リユートがクスクスと笑う。違和感が全くない。産まれた性別間違
えてないか？

「ふふつ。知ってる？このゲームは意識しないと考えが顔に出るんだよ？えつとね、フィーリングスフィードバックシステム っていうんだよ？略してFFSね。」

えつとね、の時に、顎の当たりに人差し指をのせて首を傾げる。無駄に小動物っぽい。

「じゃあ、お前はそれが素か？」

リユートがまたクスクスと笑う。ああ、無意味にム力つく。

「言ったでしょ？意識しないとって。あと、街中ではPK出来ないからね？」

つち、バレたか。まあ良い。話が進まないからな。

「紗那は？てかお前本当に龍人だよな？」

リユートがニコニコしながら答える。

「私は龍人だよ。カイトが灰斗であることは、ちゃんと確認してるから大丈夫。紗那はシャナだからね。酒場にいるから行くこうか？」

ゲームマスター
GM権限だな。シャナか。みんな名前変わらねー。
待たせているようなので頷く。

「よし！こつちだよ」

リユートに手を引かれ、酒場に向かって歩き始める。場所がわから

ないから仕方がない。周りの視線は若干痛い。無視だ無視。

#無月 紗那#

酒場の端に座りオレンジジュースを飲みながら、さっきの事を思い返していた。

紗那、いやシャナは龍人たちと待ち合わせ、《レーヴ・ギヤラント》の最初の街、「白亜の街/アルファード」に来ていた。ここは、主要産業である白亜石を使った白い街並みが特徴で、規模は街としては小さめだが、初心者向けの施設がしっかりと整備されている。また、近くの山や森は換金アイテムの白亜石や回復アイテムなどの材料が沢山とれ、モンスターもそれ程強くない。つとここまでが解説書に書いてあったこと。

まだ街から出ていないため詳細はわからない。ただ、街のリアルさは想像以上で、入って暫く衝撃のあまり動けなかった程だ。他にも入って来ている人は多いが、皆一様に固まってしまっている。

(龍人、オーバースペック過ぎるよ。)

一通り感動し、今度は制作者に呆れてしまうのであった。

ふと、広場(初めてゲームを開始すると、広場の中央付近に飛ばされる)の方を見ると、真っ白な髪の女の子が出てくるのを見つけた。その子は広場に出た所を見ると、初心者だと思われる(広場が混雑するので、広場以外の所にログインマークを打つ(設定する)よ

うに初めに指示される)のに、特に衝撃を受けた様子もなく、何かを探す様に辺りを見回していた。普通、FFSによって感動が表に出るはずだが、表情はいたって平常だ。その子の目が、こちら側を見て止まる。その瞳の色はライトグリーン。私を捉えると途端に笑顔になって、駆け寄ってきた。

「おい。リユートだよー」

リユート…？マジか。

リユートと名乗った女の子は、こちらまで来ると、私をじーっと見て、

「うん。普通に可愛いね。面白くも何ともない。ただ可愛くて綺麗綺麗してるだけ。個性無いね。」

グサツときた。これは龍人だ。相手を意識して見る事で相手のステータスを開き、見る。

LV1リユート・ダインスレフ

ハイランダー(中)

HP 128 / 128

MP 64 / 64

筋力 18

耐久 16

魔力 14

耐性 14

俊敏 17

となっていた。

いきなり中位種かよ！間違いなく龍人だ。

「龍人？ふうん。女の子で作ったんだ。中身は男です。って言い
ふらそうか？」

リユートはニコツと笑って返す。

「正解！名前はリユート・ダンスレフね！因みに、言いふらして
構わないよ。私、気にしないし。紗那は…シヤナ・エヴァイエか。
名前の方は中々かっこいいね。」

言いふらしていいのかい。そういう所が変人たる由縁かな？

「酒場に行こう。ここは人が多いから。灰斗は私が連れてくるよ。」

と言って、私の手を掴んで引っ張って行く。

「わかったから、急かさないで。引っ張るな。」

「分かった。こっち！」

リユートは手を離し、そう言って歩き出した。

それから待っててと言われて、渡されたお金で飲み物を飲みながら
待っている訳だが。

「遅い。」

ログインしてから1時間ほど経っている。そろそろ飲み物代が怪し

くなってきた。飲み過ぎたか。
そんなことを考えながら、オレンジジュースを飲み干した時、酒場の扉が開き、外からリユートと紺色の髪のエルフ（耳が長くて尖っているから間違いないだろう）の男の人が入って来た。エルフ男は仏頂面で、眉間に皺を寄せている。
リユートがこちらに駆け寄る。

「シャナー？連れて来たよー！…何このグラス？」

私の前の円テーブルの上には、十以上のグラスがある。頼むと持つて来てくれるが、回収してくれないのだ。

「ん。来ないから、ずーっと飲んだ。貰ったお金かなり使っちゃったあ。にやはははは…」

#無月 龍人#

私はグラスの中に、グリーンボトルが混ざっているのを確認した。

「にやははは… あははははははは…」

深紅の髪の少女は壊れたオルゴールのように笑い続けている。

「あらら…お酒頼んじゃったのね。シャナは笑い上戸かあ。」

カイトは呆れ顔でグラスやボトルを片付けてもらっている。

「ニヤニヤしていないで、そいつをどうにかしろ。五月蠅くてかな

わん。」

「はいはい。」

まず、ステータスを確認する。

LV1 シャナ・エヴァイエ

ヒューマン(下)

HP 120 / 120

MP 60 / 60

筋力 15

耐久 15

魔力 15

耐性 15

俊敏 15

状態 / 泥酔

状態に泥酔が入っている。

ボトル1つで泥酔かあ。シャナはお酒に弱いなあ。

因みに、お酒に弱いのは家系で、酒に対する強さは龍人 > 灰斗 > 紗那である。何故か龍人だけ異常に酒に強い。謎だ。因みに、BSだにやに出てきた龍屠は一滴も飲めない。彼の唯一の弱点かもしれない。

それはさておき、

自身のアイテム欄を確認して、酔いに効くアイテムを探す。初期の為、無いに等しいアイテムから一つだけ、酔いに効くアイテムを見つけた。

「シャナ？ごめんね！」

そのアイテム 「革命鎚／ハリセン」 を振り上げる。

スパーンっ！

かなり良い音が響く。シヤナの頭上にHPバーが表示され、ぐんぐん減る。残り半分ほどで止まり、暫くして表示が消えた。

「助かった。ヤバかった。超恥ずかしい。もう死にたい。HP減り過ぎ。」

シヤナは一言感想をポンポンと排出しながら、頭を抱えてうなだれた。

「ドンマイ！HP回復アイテムは無いから、自然回復で頑張って！」

「はい。後で一発殴らして。」

シヤナは返事をしたがまたうなだれた。

「なあ？今のアイテム何？ってか街でPKは出来ないんじゃないの？」

カイトが興味津々といった様子で尋ねてくる。このどSが。

「これはね、「革命鎚／ハリセン」っていうアイテムで、ダメージを受ける代わりに死亡を除く全ての状態異常を回復するんだよ。因みに、敵に使うと1ダメージしか入らないけど、あらゆる状態異常が高い確率で付与されるよ。ただデス（即死）の効果だけは確率1/500しかないけど。因みに、回復アイテムの使用はPKに入らない。HP0にならないし。」

カイトがかなり笑顔だ。それも黒い方に。

「俺も欲しい！どうやってたら手に入れられる？」

やっぱり。このどSめ！

「あーはいはい。LV350のダンジョンに行きたいなら一人でどうぞ。全くダメージ入らない上に即死だけど。」

「ふむ、じゃあLV上がったら行くか。」

行くのかよ！

こんなネタ武器は数え切れないほど存在する。性能はピンキリだけど。

何となく、カイトのステータスを見る。

LV1カインスヴェクス・アンメークリツヒカイト

エルフ(下)

HP 80 / 80

MP 110 / 110

筋力 12

耐久 8

魔力 17

耐性 17

俊敏 15

MP 高いな。

あ、シヤナ復活したみたいだね。

「とりあえず、何するの？」

至極もつともな質問です。

「えつとねえ…管理は結局人手不足で私の子供達がやるから、仕事無いんだよね。強いて言うなら、攻略法やイベント探しとかかな？あ、一つだけ仕事あった！」

二人が何？何？という顔で見てる。

「魔王の選出とか製作！魔王イベントはわかる？説明されてるはずだけど？」

「いや、わからん」

綺麗にハモるな（笑）

「四半期の国家間領土戦争とは別に、不定期で大陸のどこかに魔王城が出現するイベントね。魔王の強さはランダム。城の規模もランダム。敵も宝箱もトラップも何もかも。そして、魔王はプレイヤーの中から選ぶか作るか。魔王プレイヤーの戦闘技術がAIにフィードバックされて、城の魔王の戦闘パターンが作られる。つまり、城の攻略に手こずると魔王はどんどん強くなる。因みに、魔王に会うまで誰が魔王か全く分からない仕様になってる。」

説明疲れた。

「ふーん。面白そうないイベントだな。」

「ところで、私の子供達って何？」

二人とも息ピッタリだね。さすがは姉妹。男の私は肩身が狭いよ。

「それはね、私が作ったAIのことだよ。我が子も同然なのですよ」

ふーん。と二人から適当過ぎる返事が返って来るのだった。

文字数的に一度切ります

BS / 戦闘はえげつなく。(前書き)

スキルじゃないけど、「想造ノイメージング」と「投影ノトレース」
ってテクニクがあったりする予定。

あかさた軟骨。意味不明。

BS / 戦闘はえげつなく。

「さて、とりあえずチュートリアルクエストでもやって、初級スキルを覚えますか！」

リユートがそう言って立ち上がるうとし、カイトに腕を掴まれる。リユートは怪訝そうな顔をしたが、大人しく席に着いた。

「まずは、装備の確認だろうが。防具は全員布シリーズだろうが、武器はそうでも無いだろ。」

リユートが、カイトの言葉で初めて気付いたかのように頷いた。

「そうだね！こうゆう時だけは気がまわるよね！」

シヤナがすかさず、

「ほめるか、けなすか、どっちかにしなさい！」

とツッコむ。

素晴らしいコンビネーションである。良いか悪いかは置いておいて。

「はあ……。まずオレだが、ロッドだ。戦闘は基本的に魔法。MPの回復速度にボーナスがある。次リユート。」

カイトが自分だけ言ってさっさと次を促す。…是非もなし？

「私はねー、ロングソードにガントレット。戦闘は近接だね。近接

攻撃にアシストが入るよ。じゃあ次、シヤナ。」

「私は、ショートソード二本。戦闘は同じく近接。装備付加効果にボーナス。」

カイトが少し考えて、

「かなり攻撃寄りのパーティーだな。防御強いのはリユートだけか。まあカバーしつかりやれば問題ないかな。」

と結論付けた。結局攻撃系統が分かっただけだった。

「じゃあ出発！」

三人は酒場を出た。

ギルド（基本的なクエストを受ける所。報酬が平凡だが、依頼内容が明確なため安定した収入源。）に行くと、案内窓口がこつた返していた。リユートは迷わずクエストカウンターへ行き、何かのクエストを受けて来た。

「チュートリアルクエストの三人用のやつ受けてきたから行こうか。説明は歩きながらね。」

カイトとシヤナは顔を見合わせ肩を竦めるのであった。

#無月 紗那#

ギルドから出るとリユートが嬉々として喋り出した。

ああ、テンション高い。私たち（私と灰斗ね）はリユートに雰囲気
をぶち壊されたのに！（でも、灰斗なんて入った時の驚きにすらほ
とんど浸らせて貰えなかった分、紗那はマシと言える。）

「まず、今回のクエストね。依頼の受注、達成、報告、報酬の受け
取りで構成されてるよ。受注は今回は訓練場の教官だね。達成内容
は、ひなたぞう陽向草15個の採取に、鉄鉱石10個の採掘、群狼5匹の討伐
だね。報告は受注者と同じ。報酬の受け取りはギルドですよ。ま
ずはここまでOK？」

「……」

私たちは気の無い返事を返すが、リユートは気にした様子も無く次
を話し出す。

「初期で覚えてるスキルは、ほとんど系統分けの無いスキルだから。
ウエポンスキルに瞬迅、裂爪、碎牙、強弾、シールドバッシュで、
マジックスキルはフォーススファイアで、ハイドスキルにフォーカス。
これだけ。まあ基本的な攻撃技と相手のステータスを見る技だね。
フォーカスは最初は名前とレベルしか分からないけど、熟練上がれ
ばHPとか他のステータスも見れるようになるよ。理解したか？」

一気に言われてもいまいち分からないな。使って覚えますか。

「とりあえず分かった。使う時になったらもう一度教えて。」

「はいはい。で、あそこが訓練場ね！」

リユートが、指差した先を見ると小さな石造りの砦のような建物があった。喋っている内に着いたらしい。

リユートもたまには役に立つな。まあ役に立たなかったら、ぶち殺してるけどね。

#無月 灰斗#

オレ達は、教官に頼まれアルファード近郊の森に来ていた。リユートが嬉々として解説を始める。

「ここはね、「芽吹き森ノリーフベル」だよ。出現モンスターの種類は多いけど、一部を除けばLV1から5位だから私たちなら余裕かな。熊だけ気を付けてね！LV15だから。私たちでも苦戦するかも。最初は逃げるが勝ちかな。採取出来る物は、回復アイテムの材料とか消耗品の材料とか換金アイテムとかだね。採掘は換金アイテムの白亜石とか初級クラフトの材料の鉄鉱石とか武器の手入れに使う砥石とか。木材は色々取れるけど最初は杉位しか使えないかな。OK？理解したか？」

「分かったから、さっさと達成しようぜ。初期じゃ魔法がクソもねえ。」

何せ一つだけだ。使い勝手も良くなさそうだし。リユートがクスクスと笑いながらこちらを見る。

「ふふっフォーススフィアは使い方次第にだよー。まあ初期なら弱いけど。実は熟練MAXにしとかないと、メテオ系覚えられないとかは内緒だからね？」

「いやいや、内緒なら言うなよ。メテオ系なんてあるのか。系って、バリエーションあるってことだよな？うわ、むちゃくちゃ気になる。しかし、リユートが悪戯っぽく微笑む。

「でもね、フォーススフィアの最大熟練度は普通のスキルより遥かに高いから。覚悟しなきゃね？」

「うわあ、鬼畜仕様きた。まあ、他と合わせて地味く上げるさ。目に物見せてやるぜ。」

メテオ系気になるから。すっげえ気になるから。やるしかねえ（笑）

「あ、リユート？陽向草ってあれ？フォークス便利だな。でも発動したりしなかったりはどうにかならないの？」

さつきから会話に参加していないシャナが陽向草を見つけたらしい。リユートがアドバイスをする。

「フォークスは、人のステータス見るのと同じで、意識して見るだけで出来るよ。それで発動しなかったら、意識して見ながら“スキルセレクト「フォークス」”って言えば発動するよ。あ、そうだ。フォーススフィアは“力をここに「フォーススフィア」”がキーだからね。」

「「うー。了解。」」

フォーススファイアのキーの簡単さに若干呆れるぜ。

シャナがぼそぼそと呟きながら、周りを見渡している。フォーカスを試しているのだろう。オレも周りの草にフォーカスを行う。

「おー、これは便利だな。陽向草はあれか。お前ら！さっさと集めようぜ。集める物多いし。」

周りをキョロキョロ見ているシャナとそれを見ているリユートを急かす。

「はいよ。」

「うん。」

それぞれ異なる返事をして、陽向草を集めに離れすぎないように散った。

陽向草を集めるついでに、消耗品の材料もリユートに言われて集め、手にいっぱいのアイテムが集まった。

「リユート！これどうすればいいんだよ！」

少し遠くの方をふらふらと歩いていたらリユートに向かい叫ぶ。リユートは気づいてこっちに歩きながら、その辺の草や石を拾う。

「えっとね、見ててね。ほい。」

リユートは何かを言った後、目の前の空間（特に何か有るようには

見えない。()にアイテムを投げる。すると、目の前の空間にアイテムが飲み込まれていく。

「これでOK。細かいやり方は、キーが“メニューセレクト/アイテムリスト”で、モーシヨンなら人差し指と中指を揃えて少し下に下げてから上に上げると開くよ。アイテムリストはタグの一番上ね。覚えた？」

キーで開くと、青色のメニューが空中に現れた。アイテムリストの収納と書かれて困る部分にアイテムを投げ入れるとアイテムが飲み込まれていった。やり方は分かったので持っている物を全てしまう。所持可能なアイテム数は初期からかなり多いようだ。リストには欄が10個程出ているが、メニューの右上に1/10と出ている。一つの欄に陽向草なら最大999個まで入るようだ。最大所持可能数が分かるのは地味に親切だな(笑)

「じゃあ、次は戦闘してみようか。」

リユートの言葉と共に、人の腰位までの大きさのある猪が草むらから出てきた。

ターゲットじゃないのか。

「この子はね、草食だけど縄張り意識が強い上に攻撃力と体力が高いから、気を付けてね。行動は単純だけど。」

リユートの説明を聞きながら、フォーカスで敵を調べる。

L V I 「カレッジボア」

となっている。細かいステータスは分からないが、さして苦戦しないだろう。ヤバかったらリユートが何かするだろうし。

「んじゃあ、やるか。」

「OK!」

「はいよ。」

返事と共に、左右にバラける。右にシヤナ、左にリユートだ。足元の小石を拾い、カレツジボアに投げつける。ドスツという無駄に生々しい音が聞こえ、小さな打撃エフェクトが表示される。

「こんなんも、攻撃になるんだな。どの位のダメージだ?」

カレツジボアがこちらを向く。狙いは間違いなくオレだ。てか、若干目が合った。敵意半端ねえ（笑）

「蹴ったり殴ったりでも、ダメージ入るよ。因みに、ダメージ入らなかった時はエフェクトが出ないから、それを目安に攻撃してね!」

リユートが律儀に説明を入れる。楽で良いわー。

「ほら、来るよ。」

シヤナに注意を促されると同時に、右に軽くステップする。すると、直前までいた場所にカレツジボアが突っ込んでくる。そこにリユートが側面へ走り込む。

「瞬迅っ!」

短い言葉と共にロングソードを突き出した。淡く青い光を纏った切っ先がカレツジボアの側頭部に当たり、刺突系のエフェクトが出る。

リユートは攻撃動作が終わると同時に、そちらへ向いたカレッジボアの横を通り過ぎる。

「力をここに（フォーススファイア）」

オレの足元にフォーススファイアを出現させる。フォーススファイアは薄紫色の球体で、複数の帯状の光から形作られている。リユートがカレッジボアの横を通り過ぎると同時に、それをサッカーの様に蹴った。フォーススファイアは狙い違わずカレッジボアの側頭部（リユートが攻撃した所）に直撃する。

「せいっ！」

フォーススファイアが直撃し、怯んだ所へシャナの追撃が入る。スキルを使わない攻撃だが、速度と体重の乗った連撃が、しっかりとエフェクトを散らす。

「シャナ、やるう！スキル無し初期ステータスでしつかりHP削れてるよ！」

連撃が入っている中に、フォーススファイアを6個程作る。

「裂爪！」

シャナが連撃の終わりにスキルを発動させる。淡い赤色の光を纏った刃がカレッジボアを切り裂くが（途中で怯んだため）怯まず、シヤナに向き直る。そこに、リユートが走り込んだ。

「せいっ！」

リユートが思いつきり、ガントレットで殴りつける。何も言っていなかったが、ガントレットの淡い黄色のエフェクトからして、シールドバツシュだろう。

リユートのシールドバツシュで怯んだカレッジボアに、更に追加作成した、12個のフォーススフィアを今度は雨あられと降り注がせる。

「やるね。」

「すごい！すごい！」

ズドドドド…！

と着弾音が響き土煙が上がる中、シヤナとリユートが賞賛の声を上げる。

「でも、甘いんだなあ。」

リユートがそう言って、土煙の中へ入って行く中から、

「裂爪！瞬迅！碎牙！せいっ！はっ！りゃっ！瞬迅！はっ！裂爪！」

と、容赦ない連撃の音が聞こえて来た。

少しして土煙が晴れると、横たわったカレッジボアの上に、リユートが座っていた。

「カイトの攻撃雑だよ？相手見えないとこっちが危ないんだからね！シヤナみたいにスマートにやらないと。」

リユートはそういいながら、カレッジボアの首にロングソードを突

き立てた。

カレツジボアは断末魔の叫びを上げながら少しの間痙攣すると、ピクリともしなくなり次第に色褪せてボロボロと崩れていった。そしてそこに素材が残されていた。

「死に方が、可哀想過ぎやしないか？オレはいいが他のプレイヤーにはキツそうな消え方だろう？」

リユートは素材を仕舞いながら答える。

「せっかくこんな環境で出来るんだから、死んだ時もそれ相応のリアクションをしてもらいたいじゃない。因みに、死に方はバリエーション多いよ。頑張ったから（笑）」

そんなことで頑張らなくて良いと思ったが、言わないことにした。

「次、どうする？」

シヤナが更に喋り出しそうなリユートより先に質問する。

「鉄鉱石とろうか。こっちだよー。」

リユートは答えると同時に歩き出した。半ば呆れながらオレはシヤナと苦笑いして、リユートについて行くのだった。

また文字数的に一度切ります。ごめんね。

BS / 戦闘はえげつなく。 (後書き)

クラフトスキルでカレッジボアを料理すると言いたい。

うまうま……かゆ……うま。

Re:BS / 本気(マジ)になりなよ。お兄さん?お嬢さん?(前書き)

灰斗、紗那の単独戦闘。なんというか……酷い。

おっと、読者にご挨拶を。

私は蒼空の旅団の一員、灰斗です。

龍人ではありません。

詳しくは蒼空の旅団のマイページにあると思います。

では、本文へどうぞ

Re:BS / 本気(マジ)になりなよ。お兄さん?お嬢さん?

#第三者?視点#

鉄鉱石は森に幾つか有る、隆起岩で採れた。リユートが何でも知ってるせいで、探す楽しみがないなあ。とシヤナとカイトは思ったが、特に口には出さなかった。どうせ、それっぽい理由言われて終わるだ。

「あゝ、また猪だよ。今度はカイトの実力を見せて貰おうか?」

カイトは、「はあ…だる…。」と言いつつ、杖を構えた。

「今度は肉片も残らず消してやる。」

「データに血肉は無いけどね(笑)」

カイトの発言にリユートが苦笑しながら答える。

シヤナは、観戦する気満々で丁度良い大きさの岩に腰掛けていた。

「じゃあ、頑張つて〜。」

リユートの緩い応援と共にカイトは駆け出す。

猪がカイトの接近に気付くが、カイトは持っていた長杖を突き出す。

「はあっ!」

データでは表せない程の衝撃を受け猪が怯む。

「カイトー？若干リアルな能力を使ってるぞ？なんで教える前から使えんの（笑）」

カイトが使ったのは、最初から全てのPCプレイヤーキャラクターが使える隠しスキル「想造ノイメージング」と「投影ノトレース」である。簡単に言えば、考えたことがゲーム内に影響を及ぼすわけだ。カイトの場合、槍で突く動作をイメージしながら杖を突き出したため刺突の威力が上がっただけである。攻撃をイメージしそれを動作に表す。たったそれだけだが、使いこなせば非常に有用だ。それをカイトは意識せずに使えている。

「力を此処に！「フォーススファイア」！」

カイトの想造が詠唱と共に投影され、複数のフォーススファイアが作られる。

「せいっ！」

詠唱の際にカイトへ向き直ったカレッジボアを長杖が強打する。キーなどを使わずに碎牙が発動していたが、気付いたのはリユートだけだった。脚を打たれたカレッジボアは地面に膝を付く。

「死ね。」

カイトの一言と共にカイトの周りに固定されていたフォーススファイアが射出される。熟練度の低さから、ほぼ直線にしか飛ばないフォーススファイアはカレッジボアの正面へ殺到する。

次々とフォーススファイアを撃ち出しながら、カイトは追加で詠唱をする。

「力を此処に「フォーススフィア」」

たった一度の詠唱で8個のフォーススフィアを作り出し打ち出す。製作可能な範囲であるカイトの周囲3メートルまでを全て使い、カレッジボアの頭部周辺に撃ち出しまくる。

「カイトももういいよ。」

カイトが60個程のフォーススフィアを撃ち出した所で、リユートからストップが入った。

「ああ？どうした？」

カイトがリユートの方へ視線を向けようとする直前、カレッジボアが色褪せ始めた。

「ちゃんと断末魔の叫び上げてたよ？カイト実はトリガーハッピー？」

リユートがニヤニヤしながらカイトへ問いかける。かなり悪魔な笑みをしている事にリユート本人は気づいていない。

「んなわけあるか。」

カイトは素材を拾い仕舞ったあと、MP残量を確認した。MPは残り30程になっていたが、すぐに回復していつている。MPの回復速度補正はかなり良いようだ。

「カイトなら、1分位でMP完全回復するんじゃない？」

リユートがカイトのステータスを確認して言う。
カイトがニヤリとして観戦していたシャナを見る。シャナは戦闘終了直後から、植物などを採集していた。

「シャナ！次に敵が出たらお前の番だからな！」

シャナは特にカイトの方を見もせずに

「うーい。」

と返事を返すのだった。それを見ながら、リユートがニヤニヤしていたのを二人は知らない。

#無月 灰斗#

森を歩きながら、先ほどの戦闘について考えていた。
明らかに初めと感覚が違った。まるで本当に現実で戦っているかのような錯覚。脳があるはずのない、筋肉の動きや関節の動きを伝えてくる。リアルでしか意味の無いはずの戦闘用の呼吸法を無意識に行っていた。

杖で突いたとは思えない確かな手応え。柔らかいと固いの中間のような微妙な固さの地面の感触。腕を振るう時に感じた空気抵抗。見えていないフォースファイアの位置を認識していた。

いくら多くのモーションキャプチャーをしていようと再現出来ないような極繊細な動き。意識にダイレクトに追従して来るPCボディ。ログイン当初きこちなかった動きがどんどん滑らかになっている。まるでもう一つの現実のような気がして来る。

あの時、明らかに私は戦いの空気を感じていた。命のやり取りをし

ているような緊張感を。

確かに、これは軍事利用出来ないな。リアル過ぎる。これを使えば、戦闘狂を量産出来る。

逸れたな。

さっきの戦闘では、一度の詠唱で複数フォースフィアを作れたが…何故だろう？これはリユートに聞くのが早いかな？

「なあ、リユート。」

「んー？なあに？」

リユートがニヤニヤとこちらを見ていた事に気付く。

コイツ、こつちが訊きたい事の予想、ついてやがるな？腹立つな！

「お前の顔すっげえ腹立つ！」

「言いたいのそんな事じゃないでしょ？」

苦笑いしながら言ってくるのがなおさら腹立つ！だがこのままだと話が進まない。我慢我慢…。

「何でさっき一度に沢山作れたんだ？」

リユートは何でも無いことのように、

「それは、仕様です（笑）」

と言った。

全然説明になってないだろ。説明する気あるのか？

「PKするぞ？」

「あはは…勘弁して（笑）説明するから。ね？」

そんな可愛く上目遣いをお願いしてきても、正体を知っている俺には効果は無い！が、やはり話が進まないのだから勘弁してやろう。…今は。

「で？どういう事？」

「あれはねえ…」

#無月 紗那#

リユートがカイトに説明しているのを聞き流しながら、周りを見渡す。どうやら、さっきの戦闘での妙に滑らかな動きについてらしい。ログイン当初、反応に若干のタイムラグがあったPCボディは、今ではタイムラグを感じられないほど思いど通りに動く。指先の微かな動きすら再現する程に。また、視覚は初めは高密度のCG映像程度だったが、今ではリアルに近い情報量だ。

これに気づいているプレイヤーは何人いるのか。

リユートの話しを要約すれば、AIが常識情報の収集を行い、バージョンアップを行っているらしい。

また、その過程で隠しスキルの想造と投影が役立っているらしい。

「っと、何か来るよ。」

リユートの一言と共に、目の前にデカイ鹿(?)が現れた。体長2Mくらいか?角がデカイ。1Mはあるだろう。複数に枝分かれし、攻撃範囲は広そうだ。

「なにあれ?私、貧乏クジ?」

リユートをチラリと見て言うと、ニコニコしながら頷いていた。

「うん。近接キラー。頑張って!体力は高く無いけど、攻撃力あるから!」

「笑顔で言うな!」

とりあえず、調べるか。

巨大な鹿を見ながら、頭の中でフォーカスという。別に口に出す必要がない事に気付いた(笑)

L V 3 「ウォールホーン・バンビ」

「この図体で子鹿かよ!おかしくない!?!」

「ふふふつ。成体はおつきいよお。」

その返答は何か変だ(笑)

そうこうしているうちに、鹿がこちらに気付いた。正確には気付いていたが、相手にするか悩んでいたようだ。行動が嫌にリアルだな。

「まあ良い。やるよ。任せて。」

「頑張つて。」

「頑張れ。」

短く意思疎通をはかり、背中の中のショートソードを抜く。

こちらの敵意を感じ取った鹿が臨戦態勢に入る。

「ちゃちゃつと終わらせるか。」

リユートとカイトが離れたのを横目で確認し、無造作に鹿に近寄る。それに反応し、鹿が意外と素早い動きで角を振り上げる。

攻撃を諦め、角の範囲ギリギリに陣取る。鹿はにじり寄ってくるがこちらは動かない。それにじれた鹿は力強く角を突き出す。

それを下へ、まるで地面にべばりつくように（実際べばりついているのだが）避ける。そこから、地面に突き刺した爪先を基に曲げていた足を伸ばして前に滑る様に移動する。

鹿の顔面がこちらの間合いに入ると同時に、立ち上がり両手のショートソードを鹿の眼に突き刺した。悶絶し角をデタラメに振り回す鹿の横を通り抜け、背後から連続して斬りつける。

「裂爪！」

剣が赤い燐光を纏い、鹿を切り裂く。

「せつ！やっ！はあ！」

振り下ろした剣を跳ね上げて切り、追従するように左の剣が同じ場所を切り裂く。そこから体を回転させ、一文字に刃を走らせる。最後に勢いと体重の乗った両手の剣による振り下ろしを叩き込む。

それを受けて尚、怯まずに振り向いた鹿の角目掛けてスキル付きで切り上げる。

「碎牙あ！」

黄色い燐光を纏った両手の剣が、鹿の大きな二本の角の根元に直撃する。

乾いた骨の折れるような音をたてて、二本の角が宙に舞った。

「せやつ！」

振り抜いた剣の中、右手の剣を引き寄せよう、袈裟に振り下ろし、体を左に捻った状態にする。

「瞬迅っ！」

右の剣を振り上げながら、それを追うように左の剣を突き出す。青い燐光を纏った剣は、右は顎の辺りに当たり、斬撃エフェクトと混ざり淡い紫のエフェクトを散らし、左は喉を斜めに貫き、同じ色の刺突エフェクトと混ざり濃い青のエフェクトを散らした。

鹿は短い呻きを上げると、脱力し地面に横たわった。消えないのを見て、ショートソードを頭の本来なら脳のある部分へと突き刺した。鹿は少しの間痙攣すると、すっかり動かなくなり、色褪せてポロポロと崩れ去った。

「んー。カイトよりは弱いな。予備動作が長すぎる。」

「いや、私達が強すぎるだけだよ？今時、戦闘経験のある大学生なんていないからね？」

そりゃあそうか。

良く考えると、小学生から木刀で殴り合ってる家庭なんてないな。私達は天才ならぬ天災だったからな。今では落ち着いたものだ。一人を除いて。

「じゃあ、そろそろクエストをクリアしようか。群狼はもう少し奥だよ。」

私とカイトは頷いて、先に歩き出したリュートを追いかけた。

キリがいいので一度切ります(笑)

Re:BS / 本気(マジ)になりなよ。お兄さん?お嬢さん?(後書き)

ちなみに。

本文を書いたのは、龍人です。私ではないです。

私は添削をして、これを投稿することしかしていません。

私の担当は設定と技名、それと呪文ですから。

では、失礼します。

なんかよくわからん設定(笑)

「想造ノイメージング」

思うこと。しつかりと心の中に形作ること。上位スキル「無限の想いを秘める者ノアンリミテッド」も存在するが、龍人すらそれを知らない。

「投影ノトレース」

想造を世界へ現出させること。上位スキル「我、紡ぐは心の欠片ノリアリテイ」も存在するが、龍人すらそれを知らない。

エーテル強度

存在強度。ステータスには表示されない。色々なことに影響する。数値的には動物(魔力などの影響を受けて居ないモノ)で約10(乗数であり、正確には900~1100である)。最低0(存在がない)最高100(世界そのもの)

マジックキャパシティ

MC

アイテムに込められる魔力の限界。魔法に係るアイテムでは、重要になってくる。武器や防具では、付加スキル使用時に消費したりする。物によるが、再充填可能。

以上。

灰斗、補足や修正、削除の必要の有る部分は下記しろ。

龍人、日本語おかしいぞ？

まあいい。了解した。

最初の二つは良いのだが、エーテル強度はもう少し比較対象が必要じゃないか？フェアリーやエルフ、それに敵として出てきそうなアンデットは動物とは数値が変わってくるだろうし。

それに、MC。あれも例えば鉄なら二十まで、とかなんか例えを出した方が理解しやすいと思うのだが？

何か反論があるなら、また連絡よこせ。

以上。>灰斗く。

エーテル強度は比較しづらいぞ？フェアリーなどはMP残量が影響するし、アンデット系とかは、マイナスとかになるし（笑）あんまり本編で出てこないし。

MCは素材上限と精錬等で変化する。初期装備は全て10ポイントストックだ。

理解したか？

ふーん、なるほど。

フェアリーとかはMP残量が関係すんのか。アンデットはマイナスになると。了解。

MCもなんとなくわかった。とりあえず、だけどな。

疑問は解消されたから。後はよろしく。

技式改訂版

フォーススリング

魔力の塊を棒の先に作り出し投げ付ける。杖系統専用。

振棍

武器に怯み効果を付加、威力強化。

以下初期技。

瞬迅

刺突。無系統。大きく踏み込んでの突き。初期技の中で速度と射程が優秀。

裂爪

斬撃。無系統。踏み込んでの斬撃。初期技の中で範囲が優秀。

碎牙

打撃。無系統。力強く踏み込んで武器を地面に叩き付ける。初期技の中で威力が優秀。

フォーススファイア

魔力球。魔法。威力は低い。

強弾

遠距離の威力を強化。無系統。多少弾速も上がる。

シールドバツシュ

盾殴り。攻撃系統は盾による。のけぞり効果有り。

Fw:Re:技

- - - - -
From: sesutya1991@ezweb.ne.jp
Date: Tue, 5 Apr 2011 20:46:05
+0900
To: h538.i14142.a2@ezweb.ne.jp
Subject: Re:技

<爪牙

<踏み込んでの袈裟から、体を少し引き刺突を放つ。

<

<シールドバツシュ

<盾で殴る。ノックバツク効果有り。

<

<チャージ

<威力等強化。動作に影響しないため、対人戦向き。無系統。初期から覚えている。

<

<滑歩かっぱ

<初級CCCスキル。移動を滑らかにし、速度を上げる。

<

<

Re:Re:〔群狼〕とハーモニクス。(前書き)

ずいぶん、時間が空いてしまった。もうすわけねえだ。

誰だよW

Re:Re;「群狼」とハーモニクス。

5分ほど歩いただろうか。

周りには背の低い草だけが生えた開けた場所がポツポツと増え始めていた。

「リユート？まだ？」

シヤナがそう問うと、リユートはニコニコしながら、

「多分この辺かな？」

と答えた。

それを聞いていたカイトは（多分じゃないだろ。）と思っていたが、口には出さなかった。

「カイトー？顔に出てますよお？リアルじゃ頑張ってポーカーフェイスしてるのにな（笑）」

「ログに（笑）（わらい）が付いてるぞ！全く。∴背中に気を付けるよ？」

リユートはクスクスと笑いながら

「はい。」

と返す。

笑い方や仕草が違和感なさ過ぎて、中身を知っているカイトとシヤナは溜息を吐いた。

そして暫く行くと、リュートがピタリと止まった。

「来るよ。」

一言、言つとリュートは周囲に気を配り始めた。

森がざわめく。

リュートの目配せと共に、広い所へ素早く移動する。

「数は？」

シヤナが問う。

それにリュートは苦笑し、

「判んない（笑）5は余裕で越えてるよ。」

カイトの叱責が飛ぶ。

「さっさと構えろ！かなり多いぞ！」

「ういー。」

「んー。」

二人はユルユルと武器を構える。

「じゃーねえ…。私が前でシヤナっち後ろだぬ〜。カイトはサイドを足止めで宜しく。」

「妥当！了解！」

「あゝ、はいはい。」

素早く陣形を変える。

一直線。それはそのままなら防衛に向かないが、カイトの火力により前後のみに敵を集められる。後は叩くだけだ。

「合い言葉は？」

リュートが問う。

「楽しく！」

シャナが双剣の切っ先を敵に向け言う。

「虐殺！」

カイトはフォーススフィアを大量に展開しながら叫んだ。

三人はそれぞれ敵をフォーカスする。

LV5「群狼」 ターゲット

三人は視界の片隅に表示されたそれにはくそ笑む。なぜなら、今回の達成条件には、群狼5匹の討伐が含まれているからだ。ステータスのターゲットの文字がそれを示している。

一斉に襲いかかって来る群狼達を、シャナとカイトは手数で、リュートは技で、倒していく。あっという間にクエスト達成条件に到達したが、終わるわけもない。

群狼自体の能力は低いが、数の多さとある程度の連携により、初心者にとってみれば、脅威であった。それがいま、リユートたちは見えるだけで30匹ほどの群狼に襲われている。

「まだ、とりあえずノーダメだね。頑張ろー」

リユートの言葉に二人が苦笑いする。口には出さないが、明らかに数が多すぎる。逃げ道もない。だが、三人の顔には笑顔が浮かんでいた。

#無月龍人#

おっかしいなあ〜？こんなに出現したっけ？

迫り来る群狼を切り払いながら考える。
設定上は一度に1〜6匹程度しか出ない筈の群狼が、視界内だけでざっと30匹はいる。
敵levelや出現数などは、秩序と調和を管理しているハーモニクスの管轄だ。

（ハーモニクス？）

声に出さず、問い掛ける。この世界のデータは全て収集されているので、これで気付く筈だ。
だが、返答がない。

仕方なく、思考の一部を世界とリンクさせる。幾つかのポイントにアクセスする。

ふふふふふふ……。

頭の中へ小さく響く声。ハーモニクスだ。なんだか分らないが楽しそうだ。人がたくさん入ったのは、今回が初だ。それまでは私が調整のために何度も出入りしていただけだ。混乱してるかも、とは思っていたが、ただ単にハイになっただけみたいだ。

「リユート！」

カイトの声でチラツとフォーカスする。カイトのMPが確実に減っていた。あと、10分保つかどうか。若干薄い二時の方へ切り込む。

「できるか分ないけど、抜けるよ！」

カイトが素早く反応し、敵を誘導する。シャナがカイトに近づくと敵を切り倒し、徐々に抜けてくる。それに合わせ薄いほうへ切り込んでいきながら何人かのAIに問い掛けハーモニクスの対処を頼む。包囲の外側へ出ると同時に、まだ内側にいるカイトとシャナの為に外側から切り崩していく。チラツと簡易ステータスを見ると、レベルが大分上がった。熟練度を調べる余裕はないが、恐らく幾つかのスキルが使えるようになってるはずだ。

当てずっぽうにスキルの始動モーションを入力する。そういえば説明してないが、武器スキルなどの発動には多少の制限がある。一定の動きをするため仕方ないのだ。その代わり、キーがワードとモーションの二種になる。発動の仕方は使い手次第という訳だ。正確には初期のスキルでは、モーションキーは無いのだが。試して発動したのは、剣系スキルのシャープ、籠手系スキルのブロウだった。シャープは連撃系の4連撃だ。素早い踏み込みから、袈裟、横一文字

を行い、少しずれた位置を逆になぞるスキルで、2 mほど前進する。前に進む量や、逆になぞり始めるタイミングはある程度調節可能。ブロウは、重撃系単発だ。一步踏み出し、人で言う鳩尾の辺りに、拳を叩き込むスキルだ。出が早く威力も高いが、射程の短さとスキルデイレイ（技後硬直時間）の長さがネック。とあるスキルでデイレイを上書き出来るが、しばらく使えないスキルなので今回は割愛かな。

スキルの説明をしている内に、大分敵の数が減ってきた。おそらくハーモニクスを誰かが止めてくれたのだろう。増援が来ないため敵の数があつと言う間に減っていく。カイトのMPはもうすでに無いに等しい。

「カイト！アタック&シユート！」

「はあ！？ああ！了解！」

一瞬意味が解らないという反応をしたが、伝わったようだ。要は、武器で殴りながら魔法を使えという事だ。普通、初心者は出来ないぞ？なんか普通に出来るみたいだけどwまあ、出来ると思ったから指示したんだけどねw気にしたら負けさ（笑）最後の群狼を切り伏せ、剣を一振りして鞘に収める。血糊は付いていないがやってしまう。しかたないのにゃ〜（笑）

「ふー。大変だったね。」

「大変どころじゃないだろう！バグじゃないのか？」

カイトが若干切れ気味です。シャナは終了直後から黙々とアイテム回収してるわ。マイペースねえ（笑）

「ちょっとテンション上がり過ぎただけよー。見逃したげて。」

「…ああ、AI制御だったか。」

「そこから!？」

若干不毛な会話をしながら、アイテム回収に加わる。

「多過ぎ。もう持てないよ。どうにかならない？」

シヤナのアイテムリストが一杯になったようだ。自分のアイテムリストから、袋を取り出して言う。

「初期アイテムの中に素材袋（15）つてのがあるから、それ取り出して入らない物詰めてね。袋系アイテムは、容量が体積だからね。あと、仕舞うと中身アイテムリストの中に出ちゃうから気をつけてね。」

シヤナは説明を聞きながら袋を2つほど取り出して、どんどんアイテムを放り込んでいく。たまに、素材に混ぜつつドロップしているスローピック?（投擲系飛針最低ランク）を放り込もうとしてはじかれているが。弾かれたスローピック?を拾いながら、補足を入れる。

「素材袋は素材しか入らないから気を付けてね。何でも入る万能袋も有るけど、高すぎる上に容量少ないんだよねー。あの子達も良く考えて作ってるわー」

「ふーん。まあ、名前見たら入れれる物判るんでしょう。最初は素材袋だけか…。」

「そ。何種類かはお店で買えるから。お金に余裕出来たら、見てくらん。」

「ういー。」

シヤナっち、君は酔っ払いかw

「珍しく顔に出てるぞ。」

「こりゃあ、失敬（笑）」

目ざとくカイトに指摘されるが、苦笑いで返す。カイトは何故か若干拗ねているように見えた。何でだろ？（変なところで鈍感。）アイテムを拾い終え、帰り道を歩き出した。

Re:Re;〔群狼〕とハーモニクス。(後書き)

また、設定増える予感(笑)

さあーて。何を書いじつか？（前書き）

ねむーい。

さあーて。何を書こうか？

現在計画中

ディープグラウンド
深淵世界編、オンライン閉じ込め物

ロストグラウンド
失われし地編、異世界迷い込み

ブックオブラグナロク
黄昏の書編、特別ルール

リミットオーバー
限界突破編、廃人虐め

といったところか。

ディープグラウンド
深淵世界編は、まあ、なんだ……。大陸の面積の10倍のダンジョンに挑めと。ちなみに、全百階層で百階層全ての面積の合計がまあ、大陸の10倍と……。厳しい(笑)

ロストグラウンド
失われし地編は、異世界に迷い込む。マイキャラとか全員で(笑)カオス(笑)目標は全て遠き理想郷への到達。荒廃してるので、それもどうにかしないとならなかったり？するかもよつと。

ブックオブラグナロク
黄昏の書編は、特殊アイテムと特殊スキルの争奪戦。特別ルールが適用される。それは、死＝存在の消滅(キャラデータの削除)。強制的に全てのプレイヤーに適用されたために、一時的に、ログイン人口(平均ログイン人数)が激減。

リミットブレイク
限界突破編は、LEVEL1,000プレイヤー達が、限界突破クエストで散々虐められるお話。一番酷い話かもね(笑)リユートたちは楽しそうだけどwww

さて、どれから行こうか。

Fwd:イベクエ?なにソレ?美味しいの?(前書き)

とうとう、本編突入。

Fwd:イベクエ?なにソレ?美味しいの?

- - - - -

米食べられません!

とりあえずさ、

「」「」どうしてこうなった!!」「」

三人の叫びは虚しく響いた。

幾つもの叫びの中、凜と響く二つの声。
まるで何事も無いかの様に静かに響く一つの声。

騒がしい戦場の中、一際騒々しい。主に叫び声とか悲鳴などで。
他の所は、勇ましい気迫の音が響く中、その一帯は地獄と化していた。

「腰引けてるよー?ふふふふふっ」

装飾の少ない無骨なロングソードを片手に、重装のプレイヤーを薙ぎ倒す女(ひと)一人。

「はっ！おっそいなあー。そんなんじゃ・・・死ぬよ？」

深紅の刀身を持つ刀と漆黒に染まったショートソードを手に槍や棍を持つプレイヤーを刻む少女（ひと）一人。

「・・・死ぬ。」

不思議な輝きを放つ蒼銀のロッドを振るい、蒼炎の華を描く青年（ひと）一人。

これを地獄と言わずして何と言おう。レベル差が二百以上あるとはいえ、普通なら数に押されてギリ貧になるはずだ。普通なら。

三人のHPバーは全くといっていいほど減っていない。減っても次が入る前に自然回復してしまっている。根本的に、攻撃が当たっていないのだ。一見棒立ちに見える青年は、高次元の魔障壁を展開し近づくことさえ困難だ。

乙女（という名の鬼神）二人は言わずとも解るだろう。

そして暫らくの後、

空は蒼で覆われた。

今回の戦争では、少数勢力に加担したため、中々に手応えが有った。最近、一部の国に戦力が固まって戦争が蹂躞っぽくなってきているので、それを牽制するため、参加人数の少ない国にギルドメンバーで話し合っって人を送った。

結果やり過ぎて、送り込んだ国は大群に勝ち、その国同士の戦いで

は、絶対者（Lv&スキルカンスト）による、大激戦が繰り広げられた。ちなみに、リユート、カイト、シヤナ組は全勝している。最後の戦いは悲惨だった。カイトによる殲滅系広範囲魔法により、開始1分で敵勢力は半減。突出した絶対者4名をリユート、シヤナの二人で押さえ込み、さらに、Lv1000のプレイヤーを片手間に打ち倒し、最後はカイトの専用スキル「蒼穹の水鏡」を残りMP全消費で放ち、終わった。ちなみに、自軍を巻き込んだのはご愛嬌。リユート、シヤナ兩名もHPが1/10程になった。他のプレイヤーは言わずとも分るだろう。

で、三人は完勝祝いにギルドハウスでギルドメンバー全員を巻き込み、宴会をしていた。

「みんなお酒弱すぎない？まだ、樽一つだよー？」

「お前・・・一人・・・で・・・樽一つ・・・だろ？」

カイトが吐きそうになりながら突っ込む。VRだけど吐遮物はちゃんとでる。グロイ。他の人たちは、喋る気力も無く呻るだけだ。

そして、唐突に鐘の音が響く。

「んー？何だろ？みんな起きろー！」

リユートの酩酊解毒により酔いから醒めた者たちが鐘を気にせず眠ろうとしたので、リユートは、「喝」を入れた。

「起きなさい！」

これにより、強制起床+睡眠不可になった。

「何だよー？」

「寝たい……。」

「朝あ……？」

と抗議(?)の声上がる。

「静かに。」

リユートの一言と共に、落ち着いた女性の声が響く。

「新クエスト「深淵の底へ」を開始します。以下のシステムが変更されました。」

- ・ログアウト不可
- ・ディープグラウンド深淵世界への入り口の開放
- ・イベントアイテム「大地への燐光」の追加

クエスト達成条件は、ディープグラウンド深淵世界の突破です。尚、現実の体は、クエスト開始と同時にLG社へ保護依頼を出してあります。

では、御武運を。」

アナウンスはそこで終わった。
で、鐘の音の続く中冒頭へ戻ると。

「どじするっ。」

「今日は寝る。」

リユートの問いにギルメン全員が完璧なタイミングで答えた。

.....

Fwd:イベクエ?なにソレ?美味しいの?(後書き)

どうしよう。勢いで見切り発車。事故るかも。

もう終わりそう？いえいえ、まだまだです。(前書き)

会話解り辛いので名前入れました。

ちよつとウザイかもですが勘弁してください^^;

もう終わりそう？いえいえ、まだまだです。

リユート「もう一カ月かぁ……。早（笑）」

カインス「何も無かったな。」

シャナ「ほんと、アレ始まった以外なんかあった？」

現在地、ディープグラウンド深淵世界76階。

セイ「もうひと月あったらクリアできるんじゃない？」

リユート「あゝ。それは無いと思うよ。あの子達は優秀ですから」

カインス「優秀すぎんだよ。」

リユート「えゝ。ひどーい。」

現在のパーティ編成、リユート（lv1200）・カインスヴェクス（lv1200）・シャナ（lv1200）・セイ（lv1200）・ゼト（lv1200）・フィーネ（lv1111）・クレフ（lv892）・イリゼ（lv994）・イクシス（lv994）・リオ（lv798）・シリーズ（lv1103）・ルイン（lv1019）・アルク（lv1182）・エルク（lv1023）。ほぼ、1stから3rdまでのメンバー。

アルク「早く行こう。77階は直ぐそこだ。」

ゼト「だといいな。だんだん酷くなってる。」

アルク・エルク「否定できん。」

言葉の割りに雰囲気はピクニックである。絶え間なく襲ってくる魔物たちを蹂躪しながら奥へ進む。

リオ「ぜえ……。ぜえ……。超越者組み余裕過ぎるよね。」

シーリス「絶対者組みは敵スルーだしね。」

クレフ「僕たちが弱い訳ではないのですが。AIである僕たちが先に疲労しているのは異常ですね。」

リオ「いや、あたしたち以外が強過ぎるだけだから。」

クレフ・シーリス「確かに！」

千レベル以下のメンバーと回復役のルインは放置される敵と戦いながら追いかける。一応HPは減っていない。最上位のリジエネレーションがかけられているからだ。

リユート「ボスフロアとうちゃあ〜く！」

その一言で皆フロア中央を見る。

そこには、これから起こる惨劇を知らない強大なはずの魔物が待ち構えていた。

リユート「じゃ、まずわクレフとリオとルインで逝こっか。」

クレフ「リユートさんそれは無いのでは・・・？」

リユートの発言にクレフから静かな非難が入る。他二名は灰になっているが気にしなくていいだろう。

リユート「大丈夫！死なせないから！」

クレフ・リオ・ルイン「『『そう言う問題じゃない』よ・でしょ・です』！』『』『』」

そんな突っ込みを笑顔で黙殺して、話しながら補助魔法をかけられていた三人は、リユートの強制転移によって問答無用でボスの前に投げられた。

クレフ 「戦いたくない……。」

リオ 「……諦めなさい。」

ルイン 「そう言うリオも尻尾が丸まっていますが……。」

クレフ 「ルイン、ホントのこと言っちゃ駄目ですよ。」

リオ 「く〜れ〜フ〜?」

ルイン 「ま、前!!!」

言い争いしていてもボスは止まらない。

身長が4.5mある上半身がミノタウロスで下半身が馬のケンタウ
ルスの亜種みたいなボスが軽く2mはある大剣を薙ぎ払ってくる。

リオ 「クレフ!」

クレフ 「はい!」

リオの声にクレフは素早く反応し、前へ出て塔タワー盾シールドを構える。

クレフ 「ぐうっ!?!」

盾の中心に直撃した大剣はそのまま力任せに振り切られた。クレフは衝撃で3mほど押し流される。

リオ 「データ！Lv930〔ネイオックス〕HP・MP不明、
接近戦が得意みたい！属性は特に気にしないでいいよ！他不明！」

ルイン 「了解しました。回復・補助・妨害を開始します。」

リオの解析と同時に、クレフへ回復魔法がかかる。ルインがさらに
多重詠唱を始める。

リオ 「クレフ！留めることだけ考えて！攻撃は最小限！防御は
最大限！」

クレフ 「任せてください！」

クレフは一步前に出て、相手の注意を引くためスキルを発動する。

クレフ 「こっちです！」

クレフの殺意の視線をネイオックスは睨み返す。

リオ 「がりょうついで臥龍鎚！！！」

リオが横から飛び上がり頭狙いで体術スキルを放つ。ネイオックス
はそれを見向きもせず大剣の腹で受け止めた。
そして、ネイオックスの全身に“眼”が咲いた。

リオ 「にゃああああー！！！！！！！！！！」

リユート 「きゃあああー！！！！！！！！！！」

フィーネ 「いやあああー！！！！！！！！！！」

複数の悲鳴と共に、リオが空踏エアハイクを駆使しこれでもかという速度で距離をとる。

それとほぼ同時に無数の破裂音と共に、ネイオックスの眼が撃ち抜かれる。

カインス「お前ら落ち着け。まあ殺やらなかつたのだけはほめてやる。」

カインスが呆れて言うその先には、リユートとフィーネが涙目になっていた。

リユート「だってビックリしたんだもん。気持ち悪いし。」
フィーネ「あうう……。ううう……。。」

瞬時に取り出した二丁の拳銃をしまいながらリユートは反論を試みる。一方のフィーネはネイオックスから顔を背け、半泣きで「ミニガン（回転式六銃身7.62mm機関銃）に三百連箱型弾倉を取り付けている。」

ゼト「リユート……。取り合えずフィーネを止めてくれまいか？」

リユート「私に蜂の巣になれと？」

リユート達の顔が引きつる。

リユート「リオ……！散開……！」

リオ「みんな逃げろ！」

ネイオックスからクレフを除く、二人が距離をとる。

カインス「クレフ・・・ドンマイ。」

クレフ「だ、誰か助k!!!」

クレフが言い終わる前に、鉛の嵐はやって来た。

.....

クレフ（ボロ）「僕・・・生き・・・て・・・る？」

リユート「カインスの回復削るって・・・。フィー？何を使ったのかな？」

弾丸から逃げるように倒れたクレフはHPを5分の1程度に削られていた。

フィーネ（泣）「う・・・。ごめんなさい。」

リユートが落ちてしている薬莢を拾い上げる。

リユート「エクストラードインセンディアリーEE弾か。一応高級品なんだけど。モンスタードロップオンリーだし。」

フィーネ「その・・・一番・・・威力があつたから・・・つい・・・。」

リユート「オーバーキルだよ？まあいつか・・・。」
アルク「良くない。こいつらのレベル上がらないだろ。」

クレフの手当てをしているカインスに代わって、アルクが突っ込みに来た。

リユート「大丈夫。あと、五階も上がったら嫌でもレベル上がるから。」

lv1000以降、必要経験値が跳ね上がるのと同時に、獲得経験値も同じくらい増える。大体、必要経験値がlv999に対して約100倍ほど。獲得経験値は20〜30倍になる。戦闘経験値に関しては、おおむねlv200ごとにそう言った現象が起きる。

リユート「さてと、次行ってみよう！」

みんな「了解。」

更なるツッコミを防ぐため、そう宣言したリユートに皆反射で返事をするのでした。

もう終わりそう？いえいえ、まだまだです。(後書き)

次は資料かなたぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494q/>

Fw:Re:さっきのについて

2012年1月1日02時48分発行